

INSIDE-OUT

木二中 学校だより No.13 令和5年7月3日
校長 山元 竜二

木更津市立木更津第二中学校
〒292-0801 千葉県木更津市請西941番地
☎0438(36)2280 FAX0438(36)2233

E-mail:kisarazu2-j@kisarazu.ed.jp
<https://www.fureai-cloud.jp/kisa-kisarazu2-j>



先生嫌いGくん ～自我の芽生えに大人がどう向き合うか～

かつて私が高校に勤務していたときの教え子 G くん。高校2年、3年と2年間担任させていただきました。現在、某会社の営業マンとして毎日元気に生活を送っているとのこと。

高校時代にいろいろ問題があった G くん、実は小学生の頃から先生が大嫌い。先生に叱られると、「1回しか人生を送っていない人に何でいろいろ怒られなきゃなんないの？」(笑)

「そんなこと昔は平気で言っていましたねえ(汗)」と今では笑い話です。中学、高校に進学しても先生嫌いには拍車がかかります。高校1年生の頃には休みがちになってしまいました。高校ではどの先生の言うことも聞かなかったため、いわゆる「問題生徒」という目で見られるように。

そんなある日に事件発生です。私が出張していた日のことです。私がいなくてに限りて必ず問題が発生するクラスだったのですが、その日は G くんが喧嘩を。しかも2人を相手にケガを負わせてしまったのです。

出張から帰った私はすぐに G くんが監禁されている会議室へ。G くんは4人の先生方に囲まれていました。

「すみませんでした。先生方、あとは私に任せてもらえませんか？ G と二人だけにさせてください。」

(G くん心の中で)「やべえ。山元先生と2人になるのだけはやべえ。」

「なあ、G、もう大丈夫だ。俺が出張から帰って来たんだ。心配するな。」

G くん「え？…。そ、そんな…」と言ったきりあとは声を出して大泣きです。

「しえ、しえんしえーい、俺、もう絶対遅刻しましえーん。もう迷惑かけましえーん。」

ずいぶんと時が経ってから、あの時に何で大きな声で涙を流したのかを話してくれました。

G くんは先生嫌いには理由がありました。ちょっと人と違う視点や考え方を持っていた G くん、誰も自分に耳を傾けようとも、誰も理解してくれようとも、認めようとしなかったのだそうです。

「心配するな」という言葉をかけてもらったのももちろん初めてだったとか。自分の存在が初めて認められた瞬間でした、と。

自我の芽生え

中学生は思春期や反抗期という、肉体的にも精神的にも難しい時期(成長過程)のまっただ中にいます。親や先生といった「権威」や、「社会のルール」などに否定的になり、自分以外のものを軽蔑の対象にしたりする。あるいは、理想と現実のはざまで、うまく自分の心をコントロールできずに怒りの矛先が自分自身に向いたりする。そしてある時には、自信のない自分を他人に悟られないよう何もかもを否定し、反抗してみたりする。

でもこれらは、みんな正常な生き方。親や先生だって、会社の社長さんだって誰もが通ってきた道でもあるのです。言い方を変えれば、「**自我が芽生えて、自立が始まった**」証拠です。

自我とは、「自分のこと」。だから「自我が芽生えた」とは、自分そのもの、自分の存在に自分自身が目覚めた、ということになります。

生活のすべてを親に依存していた時期を卒業して、自分で考え、自分の判断の基で行動していくことを始めた、ということ。

まだ小学校低学年の幼い頃のように、親や先生の言うとおりにしていれば、自分に不利になることは起こるわけがありません。何をやっても結果だって良いに決まっています。でも自我に目覚めることも、自我を確立することもなく、何でもかんでも人の言いなりになっていたら、他者の言う

ことを拒否できない大人になってしまう。だから人は誰でも「やだ」、「やらない」、「ちがう」、「放っておいてほしい」、「うるさい」と反抗期を過ごすことで、将来自分を守るための必要なスキルを学んでいるということになります。自我に目覚め、反抗期を経て自我が確立し、そして人はやがて他者と折り合うことを覚えていく。時には他人と歩幅を合わせて歩くこと（協調・協力）を覚えていく、と私は考えています。

「自我の芽生え」とは一言で言っても、子どもの発達段階（幼児期・幼児期前後期・学童期・青年期…など＝エリクソン：心理社会的発達理論を提唱）によってその特性は異なり、心理社会的発達理論の中で中学生は、12歳～18歳くらいの「青年期」と呼ばれる発達段階に分類されています。「青年期」という時期は、

- ・（他者・社会との関わりの中で）自分とは何者なのか。
- ・自分は何をしたいのか。
- ・将来どのように生きていくべきなのか。

といった、自分が自分であることと社会から認められたいと欲求することとの間にギャップ（アイデンティティ・クライシス＝自己喪失）が生じることから、「アイデンティティの確立」が発達課題であると言われています。

〈参考文献：藤村宣之編著「発達心理学」〉

では、このような青年期を迎えた子どもたちと大人がどう向き合っていくべきなのか。これは子育てにおいて一番大きな問題ではないかと思います。「親の言うことはちっとも聞きやしない。」なんていうお話もよく耳にするのもやっぱりこの時期でもあります。

子どもの特性など当然個人差はあるとは思いますが、基本的にはそれぞれの立場の大人が（保護者・教師、その他関わりのある大人）、子どもとの適切な距離感を保ちながら、◇理解すること、◇認めること、◇信頼すること、◇受け入れる（共感する）ことではないかと考えます。例え、うまくいかないとわかっていても、許容範囲の中で一個人として理解を示し、個人としての主張を認め、「やりたいようにやってみろ！」と信頼し、どんな結果（失敗は特に）であっても受け入れ、共感する。それらがこの時期の子どもたちを「見守る」ということなのかなあと思います。

私も来年には中学生になる息子と小学3年生になる娘の親ではありますが、わかっていてもなかなかできずについつい口を出してしまうことばかり。親として、ある程度は口を出すのも仕方ないことかもしれませんが、口を出しすぎてしまうといわゆる「過干渉」となり、この時期の子どもにとって大切な自我の確立や社会的成長を奪ってしまうことになりかねない。命を守るという意味では「過保護」でいいと思いますが、過度な干渉だけは避けなければと自分自身に言い聞かせています。

山口県の元教育者とされる方（氏名不詳）が「日本時事評論」にまとめた、

- 一、乳児はしっかりと肌を離すな
- 一、幼児は肌を離して、手を離すな
- 一、少年は手を離して、目を離すな
- 一、**青年は目を離して、心を離すな**

という「子育て四訓」は、テレビの子育て情報番組でもよく紹介され、教育界でも有名ですが、子どもとの距離感が大切であるという的を射た表現だと思います。